

# アトリエ 琉游舎 だより 222号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年1月14日発行

## 寒椿っひに一日の ふところ手



石田波郷

- 真冬に咲いている椿を寒椿、他の時期に咲いている椿を単に椿と呼ぶものとはばかり思っていました、それだけの違いではありませんでした。あらためて家に咲いている椿はどちらなんだろう、また山茶花との違いもよく分りません。私にはどれも椿にみえてしまいます。
- 調べてみると寒椿は11月から2月に咲き、椿は2月から4月頃、つまり寒椿は冬の花、椿は春の花でした。また寒椿は樹形が横に拡がり花は葉の付け根につき、椿の樹形は上に伸びて花は葉の先端につくそうです。花の散り方も寒椿は花びらが一枚ずつハラハラと散り、椿は花首からぽとっと落ちるとのこと。ところが山茶花も交えて三者の違いを調べてみても、書いてあることがそれぞれ違い（AIの答えも違います）何が何だか分らず混乱するばかりです。
- 名前の違いは後から人がつけたものと考えれば、今、目の前にある花をありのままに観ることができればよいのでしょうか。石田波郷の句には冬の寒さに一日中ふところ手をしていた自分と、その寒さの中、一日中鮮やかに咲く寒椿の健気な姿に共感する作者の姿があります。
- ふところ手は和服だからこそ可能な仕草です。今なら両手をポケットに入れています。一日中ふところ手のまま過ごした寒い波郷、寒さに咲く寒椿の姿に、懷に手を入れているような自分との一体感を感じたのでしょうか。ポケット手ではその光景は観えてこないはずです。
- その光景は寒椿も椿も山茶花も関係ありません。名前は人が名づけたもの。自然は名前にとらわれることなく、ありのままの姿で私たちの眼前に立ち現われます。ありのままをそのままだに観ることができることが、自然とともに生きるということです。そんな一年を送ることが出来るよう、今年も自然と共に心穏やかな日々を過ごしていきたいと思います。合掌。

読書会はしばらく休止しますが、皆さんの要望で再開します  
読んでみたい本や希望の日時があればお知らせ下さい

写経会2月1日（日） 13時半から

## 狂言綺語…カミとホトケの出会い(承前)

今年も散歩道沿いの鴨池に氷がうっすらと張るようになって、鴨たちの整列姿が見られるようになりました。鴨は所々に張った薄氷を避けるように泳ぎながら、池の表面に浮かぶ太い倒木の上に集まってきます。一列に羽毛を大きく膨らませながら等間隔で太陽に向かって整列する光景は、穏やかな真冬の一点景です。昼頃になると氷も溶けてきて池の中を自由に泳ぎ回るようになり、時たま水の中に顔を突っ込んで、なにやら食べている様子。気ままに泳いでいるようにみえても、家族同士なのか七、八羽くらいが集まって、動き回っているようにもみえます。それは鴨たちの独自の秩序のようにもみえます。たまに争いらしき光景を目撃しますが、それでも内輪もめ程度ですぐにまたのんびりと水面を泳ぎ、倒木に上がり太陽に向かってひなたぼっこを始めます。鴨社会の平和と秩序を保つために鴨社会独自のルールがあるに違いありません。

鴨社会のルールはどのような原理で成り立っているのか、私には知るよしもありません。しかし個人や群れ（家族）が生き続けて子孫を残すためであることは、生き物の本能、種の保存から考えれば間違いのないところでしょう。ただそれが一羽の鴨のため、家族のため、池を泳ぐいくつかの集団のため、それとも鴨という種全体のためなのか、そのメカニズムは分かりません。一方、人間界のルールは誰のためで誰がルールを作るのかは、今やはっきりしたようです。国益や安全保障、歴史認識の下に行われている様々な侵略や主権侵害、内政干渉、経済的圧力は、力（軍事と経済力）を持つものが自らのために自らルールを作りそのルールを正義あるいは真理（絶対者の意志）の名の下に遂行しているという事実を何度も目撃させられています。それは私たちが、自由や人権や平等などが幻想にしか過ぎないということを認識するには充分すぎるほどの力の行使です。民主主義が絶対的な価値としてきた自己の存立基盤（自由・人権・平等）は、人類の、あるいは民族、国家、部族、宗派、政党、企業、はたまた個人のすべての存在の利益と幸福のためにあると思っていたところが、それは実は権力意志の都合で基盤（ルール）を自由に変えてもよいことがあきらかになりました。その新しいルールに対抗するには「力」を持ってするほかないのですが、そもそも力の無いものがルールを叫んでも無力であることもまた明らかになりました。年明け早々のドンロー主義の蛮行に対しても、有事発言への意趣返しの中華思想の履行にも、発言はするもののそこに行為が伴わなければ、とりあえずは「言ってはみました」だけの、民主主義の価値観共有にもならない日本の独り言なのです。それが維新以来長州が推進してきた現実主義の伝統に則っているならば、まさしく正当保守の伝統芸ともいえるのでしょう。

明治以来日本が進んできた道に主義と言えるものがあるならば、それは現実主義、折衷主義だと思われます。主義がある理念や絶対意志に立脚しているならば、それははっきりと民族の背骨として歴史を貫いているはずです。例えば西洋は神の意志とその実現のための理性、中国であれば中華思想であるように。ところが日本にはその背骨が見当たらないのです。万世一系の天皇がその背骨だと主張したがる人はいるでしょうが、それは時の権力が日本人の「カミへの情」を時々で都合よく利用してきた結果だと私は考えます。背骨は本質であり、真理であり、不変のものです。私たち日本人には生来の背骨はありませんでした。常に外から与えられ、何とかそれらを生得のものにしようと試みましたが、背骨の構築は不発におわったのです。

私は日本人にある唯一の生得のものは「カミへの情」だと考えます。この情が、あらゆる自然、生きとし生けるものをカミと観て、カミの精神と繋がることで、私たちはこの過酷な自然の中に生活をし続けることを可能としたのです。精神活動の根本と哲学者カントが考える「知・情・意」のうち、「情」として日本人が交わす対象は「カミ」です。では「知」はどこからやってきたか、まずは中国経由でやってきた「仏教」です。現在日本にある仏教は、印度発祥のお釈迦さまの仏教とは似ても似つかない仏教となっています。それは「カミとホトケの出会い」の結果です。神仏習合により「知」をホトケが、「情」をカミがひきうけることで日本人は生来のカミと外来者のホトケを折衷し、日本独自の精神世界を作り上げました。維新以降、政府は日本人の生得のものとなっていた「知」と「情」を神仏分離令で引き裂こうとしました。そこに西洋の「知と情」であるキリスト教の概念を取り入れようとしたのですが150年経ってもそれは実現していません。早々に西洋から学ぶものは西洋の「知と情」が結果として生み出した「技術」だけという現実主義・折衷主義に宗旨替えをしたのです。見事な変わり身の早さです。中国発祥の「儒教」や「朱子学」も同様の結果です。それらの「知」の根本は中華思想です。支配者が支配を行うための倫理と論理です。それは易姓革命という中国の王朝交代を正当化するための論理です。つまり易姓革命を背後から支える思想が儒教です。ですからその思想が日本の天皇制と相容れないことは自明なのです。日本人は儒教から民衆支配のための倫理観を抽出し、日本にあるシステムとの折衷を図ったのです。つまり「仁義礼智忠信孝悌」の実践と日本的システムの現実的な統合です、その結果、天皇制維持、家父長制、武士道などの概念が生まれたのでしょうか。

私は日本人の現実主義・折衷主義をデメリットではなく逆に強みだと思っています。それは「知・情・意」のうち「意」がないことにあると考えます。日本人にも「意」があると言われるかも知れませんが、それは「知・情」の精神の営みの結果を行動に移すときの意識や意志というものです。ところが西洋では、まずアイデア（真理）の獲得という意志が知と情の活動を指揮するという方向に精神活動が行われていたのです。そしてキリスト教の発明と共にアイデア（真理）の獲得は絶対神の意志であるとなったと考えます。一方が「知と情」が主で「意」が従であるのに対し、絶対神の「意」が主となり「情と知」を動かす、正反対の道を辿っていると思われるのです。それを強みと考える理由はこれから明らかにできればと考えています。